

# 大鏡『道長の豪胆（肝だめし）』定期テスト対策問題 | 敬語・現代語訳・内容の頻出設問と解答 解答・解説

---

問1 (そのような所に一人で) 行けるだろうか、いや、行けまい。／「往ぬ」(ナ変) 未然形+推量「む」+係助詞「や」=反語。帝が皆を試す挑発の言葉。

問2 「とても参ることはできますまい。」(殿上人たちの言葉)／「え〜じ」=不可能の打消推量。道長以外の人が尻込みしたことを示す。

問3 命がございましてこそ、ご命令もお受けできましよう(命がなくなってお受けできません)。／命あつての物種、という弁明。

問4 たいそう何気ないふうで、何事もなかったような様子で。／恐れた様子が全くない道長の豪胆さを示す。

問5 「手ぶらで帰参いたしましたなら、(行った) 証拠がございませんでしょから、高御座の南面の柱の下のところを削って(持って) 参ったのです。」／「ただにて」=何も持たずに。「候ふまじき」=丁寧語+打消推量。

問6 少しも食い違わなかった。／道長が持ち帰った削り屑と、大極殿の柱の削り跡。「つゆ〜ず」=全く〜ない。これで道長の言葉が真実だと証明された。

問7 「思ふ」の尊敬語。語り手(作者)から帝への敬意。／「けむ」は過去推量で「お思いになったのだろうか」。

問8 尊敬の助動詞「さす」連用形+尊敬の補助動詞「おはします」。尊敬語を重ねた二重敬語(最高敬語)で、語り手から帝への最高度の敬意を表す。

問9 「申し」=謙讓語(申し上げる相手=帝への敬意)、「給ひ」=尊敬語(動作主=道長〔入道殿〕への敬意)。どちらも語り手からの敬意(謙讓+尊敬の二方向)。

問10 尊敬の助動詞「す」連用形。下の「給ふ」と合わせて二重敬語(最高敬語)。笑う動作の主体は帝自身なので使役ではない。

問11 『大鏡』は道長の栄華を主題とする歴史物語であり、語り手が主人公道長を帝に準じる存在として特別に高めているため。臣下への最高敬語は道長賛美の表れとして頻出。

問12 どちらも丁寧語。会話の聞き手である帝への敬意(話し手は道長)。

問13 断定の助動詞「なり」連体形「なる」の撥音便「なん」の「ん」が表記されない形+推定の助動詞「めり」已然形。「夜であるようだ」。文中の係助詞「こそ」の結びとして已然形になっている。

問14 「だに」=類推(〜でさえ)。「このように人が多い(場所)でさえ、不気味な気配が感じられる。」／まして人気のない場所は、と続く類推の前提。

問15 強意(完了)の助動詞「ぬ」未然形「な」+意志の助動詞「む」。「(どこへなりとも) きっと参りましよう」。願望の終助詞「なむ」や係助詞「なむ」との識別が頻出。

**問16** 推量（ここでは可能推量・意志的な推量）の助動詞「む」の已然形「め」。係助詞「こそ」を受けた係り結び。

**問17** 使役の対象を表す格助詞。「蔵人に命じて」の意。／「人+して」の形で「～に（命じて）」となる用法。

**問18** 五月下旬の、月の出ない真っ暗な闇夜。／「下つ闇」＝月末の闇。五月雨の頃でいっそう暗い。

**問19** 困ったことだ・つまらない（感心できない）。／命じられた兄二人の内心。

**問20** 「念じて」＝（恐ろしさを）我慢して・こらえて。「わななくわななく」＝ぶるぶる震えながら。／兄二人の恐怖を示す重要語。

**問21** 「つれなく」＝平然と・何事もなかったかのように。「あさましく」＝驚きあきれるほどで（ここでは非難ではなく驚嘆）。／道長の豪胆さと、それに驚く帝の対比。

**問22** 道隆＝豊楽院、道兼＝仁寿殿の塗籠、道長＝大極殿。

**問23** 中関白殿＝藤原道隆、粟田殿＝藤原道兼、入道殿＝藤原道長。／三兄弟の呼称は超頻出。

**問24** 道隆（中関白殿）は、宴の松原のあたりで正体不明の声々が聞こえたため、どうしようもなくなって引き返した。道兼（粟田殿）は、仁寿殿の東面の砌のあたりに軒と同じ高さの人（のようなもの）が見えたため、無我夢中で引き返した。

**問25** 出発前＝帝の御手箱の小刀を借り受けて出かけた（削って証拠を持ち帰るため）。帰参後＝高御座の南面の柱を削った削り屑を差し出した。／「証なきこと」への周到な対応が道長の豪胆さと知略を示す。

**問26** 丑の刻はおよそ午前1時～3時頃。「子四つ」（午前0時半～1時頃）と奏上されてから命令や評定をしているうちに丑の刻になったのだから、真夜中過ぎの最も不気味な時刻である。

**問27** 平安時代後期成立の歴史物語。大宅世継・夏山繁樹という二人の老人が昔を語り合い、若侍が批評を加えるという対話形式（紀伝体で道長の栄華を描く）。

**問28** 大鏡→今鏡→水鏡→増鏡。／「だいこんみずまし（大今水増）」の順で覚える。